

メッセージアウトライン コリント人への手紙 第一14:26～33a 「神は混乱の神ではない」

[26]「兄弟たち。では、どうすればよいのでしょうか。あなたがたが集まるときには、それぞれの人が賛美したり、教えたり、黙示を話したり、異言を話したり、解き明かしたりします。そのすべてのことを徳を高めるためにしなさい」

ここでは公の礼拝の時のことが言われている。当時の礼拝は非常に自由な形で礼拝が行われ、そこでは、賛美、教え、黙示、異言、解き明かしと色々な賜物が発揮されていたようである。パウロはこれらのどれも否定していない。なぜならこれらはみな等しく御霊の賜物として神が教会に備えられたものであったからである。しかしこれらはすべて教会の徳を高めるために用いられなければならない。特に異言を重んじ、それを追い求めていたコリント人たちはこのことをよく肝に銘じなければならない。パウロはこの異言に対して14章をまるまる費やして具体的な指導をしている。しかし、彼は異言を禁止しているのではなく、礼拝においても異言を語る道を示している。

[27]「もし異言を話すのならば、ふたりか、多くても三人で順番に話すべきで、ひとりは解き明かしをしなさい」

コリントでは異言を話す者が大勢いたので、これを規制したのであろう。それまでは彼らは礼拝でいっせいに異言を語っていたのであろう。これでは未信者がつまづいてしまう。→14:23 それでパウロはこのような指導をしている。

[28]「もし解き明かすものがだれもいなければ、教会では黙っていなさい。自分だけで、神に向かって話しなさい」

異言を語る場合、それを解き明かす者が必要とされる。そのような人がいないならば彼は教会では黙っていなければならない。そして家に帰った時に自分だけで神に語るべきことが勧められている。理由は今まで学んできたとおりである。このように公の礼拝ではいかに秩序が重んじられ、プログラムが整えられなければならないかということが教えられる。これらをないがしろにし、混乱した状態では、とうてい人の徳を高め神を賛美する落ち着いた礼拝などできない。

[29-30]「預言する者も、ふたりか三人が話し、ほかの者はそれを吟味しなさい。もし座席に着いている別の人に黙示が与えられたら、先の方は黙りなさい」

預言する者については、ほかの者はそれを吟味することが勧められている。何でも自ら得たものを発言し、発表するばかりが恵みではない。話している者のことばが間違っていないか、神のみこころや聖書に反することが語られていないか吟味することは大切なことである。さらに一人が長々と時間を独占してはならず、他の人に黙示が与えられたら、先の方は口を閉ざさなければならない。黙示とは神からの啓示であり、しばしばそれは象徴的表現を用いて示される。ここでは預言と同じ意味で使われていると思われる。

[31]「あなたがたは、かわるがわる預言できるのであって、すべての人が学ぶことができ、すべての人が勧めを受けることができるのです」

すべての人が学び、また勧めを受けることができる。これが礼拝のあるべき姿。

しかもパウロは信者全員が預言の賜物を持っており、それぞれ代わる代わる預言できるかのように勧める。今日でいえば、神のみことば、聖書から教えられたことを学び、勧めをし、分かち合うことと言える。彼はここで異言ではなく、すべての人が学び、勧めを受けることができる預言に重点を置いている。彼はコリント人たちに、いつまでも異言、異言と熱中するのではなく、あなたがたの誰でもできる預言を求めなさいと言っているようである。

[32-33a]「預言者たちの霊は預言者たちに服従するものなのです。それは、神が混乱の神ではなく、平和の神だからです」

預言者たちの霊とは、霊魂のことではなく預言者たちに臨む御霊の現れであり、預言の賜物、すなわち神から受けたことばを語る能力のことと思われる。それは決して預言者自身を離れて勝手にふるまうのではなく、あくまでも預言者自身によって制御されるものなのである。それゆえ、御霊に動かされたようなふりをして、神が禁じられていることをあえてし、教会の秩序を乱すような者は御霊に導かれているとは言えない。真の神は混乱や混沌、不和、乱雑の神ではなく平和の神である。コリント人たちだけではなく、すべての信仰者はこの真の神を礼拝するために混乱や争いや不和ではなく、秩序をもって、また霊とまこととをもって臨まなければならない。